

# 未評価出土文化財をめぐる 博物館資料学の実践研究(1)

— 縄文文化解体期の東南四国域における無文系粗製深鉢群の再検証(前篇) —

幸 泉 満 夫

## 1. はじめに

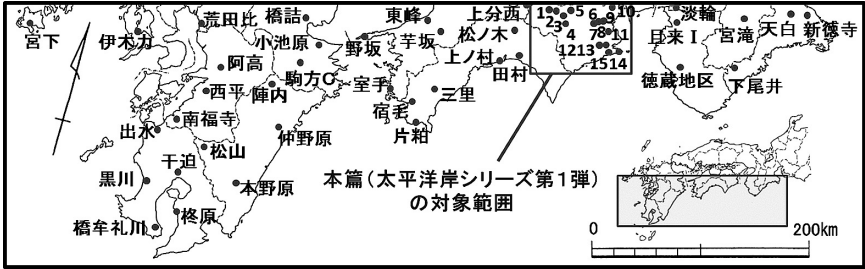
筆者は、当該紀要第37号で発表した拙稿「博物館資料学の新たな可能性」(以下、2014a 稿)のなかで、未評価出土文化財をめぐる社会的問題を取り上げた。そこでは、各地の博物館等収蔵庫<sup>1)</sup>に眠る縄文時代の、いわゆる“文様のない縄文土器(粗製深鉢)群”の問題に言及している。時として、数万点規模に達するこれら膨大な出土文化財が、研究対象として耳目を集めることもなく、収蔵庫の中で長年未評価のまま眠り続けてきたわが国の実状を紹介した。加えて、将来に向けた研究シーズ開拓の実践事例として、後期後葉の縁帯文成立期を例に、未評価のまま保管される土器群に関する新たな研究成果の一部分を公開した次第である。

ただ、紙幅の都合、2014a 稿では各小地域別での無文系土器出現の詳しい経緯や、晩期後半に向けた型式組列の特徴等、博物館資料が潜在的に有する未知の可能性について具体的に論じることができないままだった。

そうしたところ、昨年秋に公的調査実施の機会に恵まれ、ようやく未評価文化財に関する研究成果の第一弾を発表する機会を得ることができた。そこでは、大陸との門戸としての役割を担ったであろう北部九州沿岸域を中心に、膨大な数に達する未評価の無文系粗製深鉢群について、成果の一部を纏めたところである(幸泉2017)。

上記は「日本海シリーズ」として今後とも成果の連載を目指していくが、一方で、西日本内部で多彩に展開する地域各々の独自色を明らかにするためには、様々なエリアを公平に取り上げつつ、死蔵され続ける出土文化財を評価し直そうとする姿勢が欠かせない。そこで、先の2014a 稿の経緯から、本誌上にてその責を果たしていくことにした。具体的には別途、太平洋沿岸側の小地域圏群を順次取り上げていく(第1図; 以下、「太平洋岸シリーズ」と仮称)。

端緒となる本稿では太平洋岸諸圏のうち、該期資料が比較的充実する四国東南部の



第1図 東南四国と太平洋岸ベルト地帯の主要遺跡

1大柿、2稲持、3貞光前田、4加茂谷川岩陰、5荒川、6東禅寺、7石井城ノ内、8矢野・観音寺、9庄・三谷・名東、10松寺前谷川・森崎、11新居見、12宮ノ本、13深瀬、14蒲生田、15田井

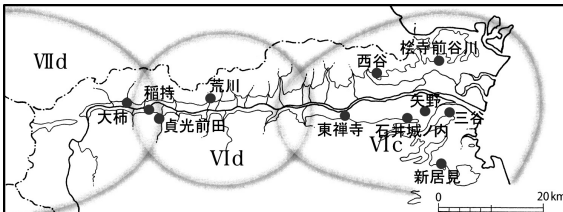
徳島県域を対象としたい（第一弾；東南四国篇）。また紙幅の都合、うち本稿は前篇とし、後期中葉以前を対象とする。

## 2. 東南四国域に関する学史抄

先史の吉野川流域では淡路海峡、紀伊水道を介した近畿地方西南部との交流が特に盛んであった。このことは、かつての筆者自身による深鉢底部の研究成果からも明白である（第2図；幸泉2002a・2009d）。

こうした東南四国域で、これまで縄文後晩期の無文系粗製深鉢を扱った論考は他地方同様、極めて少ない。対象となる後晩期資料群は、主に1990年代以降の四国縦貫道建設や徳島市近郊を中心とした公共工事に伴う緊急発掘により、急速に蓄積されてきたものである。2000年代以降は、それら各遺跡の発掘成果を纏めた報告書が次々と刊行されてきた。さらに報告書以外でも、地元関係者を中心に学術成果の公表も重ねられている（湯浅1993・1995・2017、藤川・湯浅2004、中村2008ほか）。

もっとも過去、それらの多くは隣接する関西圏の既存編年との対比に基づく型式認



第2図 底部に基づく吉野川流域の小地域圏の認識  
（幸泉2009d 第13図を基に、本篇登場の遺跡名を加筆）

定と、時期比定を第一義的課題としてきた。そうしたなかで、東南四国域の独自型式設定も次第に意識され、2003年の「矢野K式」提唱に結実したところである（藤川編2003p596）。しかしながら、出土層位（沖

積層第Ⅶ～Ⅵ層と遺構内資料)の“一括性”のみを重視した同型式の定義は不十分であり、補足説明が加えられないまま今日に至っている(藤川・湯浅2004、幸泉2004a・2010、湯浅2017ほか)。この点については近年、石井寛(以下、敬称略)や石田由紀子、千葉豊等が矢野K式の再吟味や課題点抽出を進めており、今後に期待できる側面が大きいであろう(石井2015、石田2016、千葉2016ほか)。

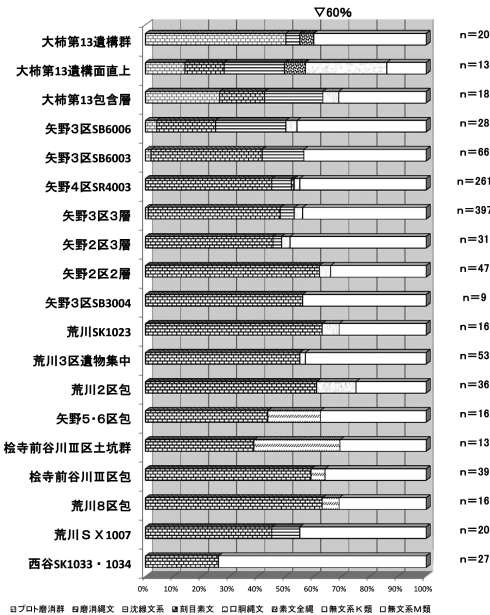
こうした学界動向と併行しつつ、一方で、筆者は当該地域における編年大綱確立以後の研究課題を模索してきた。その第一は、非視覚的属性領域にみる、いわゆる“東南四国”の小地域差抽出である。既に成果は2002年の『論集徳島の考古学』と、2009年の『考古学の源流』で公表を終えている。

上記二篇の拙稿では、吉野川下流域(Ⅵc圏)が当時の関西土器文化圏の西縁として含まれることを明らかにした(幸泉2002a・2009d)。さらに2002年1月には真陽社版『西日本の縄文土器 後期』の第Ⅱ章2. 四国を執筆担当し、以下本篇の内容に通ずる器種組成と文様系統の変遷、さらには、小地域を意識した縄文後期土器の概要を記したところでもある(幸泉2010)<sup>2)</sup>。この年、奇しくも、東みよし町の大柿遺跡(光下新町線地区)では、島田豊彰により合計13層に及ぶ精緻な分層発掘が試みられていた。そして、2005年に公的に業務を引き継いだ筆者が、氏の成果をもとに、中期末の詳細編年を手掛けることとなる。結果、当時の四国地方では初となる中期末、Stage 2段階(第3図参照)の微細な型式変化を、出土層位の連続性をもとに復元できた。さらに、該期の器種組成と文様系統組成の詳細を西日本レベルで比較し、成果発信に繋げたのである(幸泉2005・2008a)。

以上は、従来の学界で最大の関心事であった一部の精製有文器種のみを抽出した文様編年主義からの脱却と、弥生時代以降の土器研究に通有たる様式論的な研究手法へ

時期設定	年代(縄文時代)	東南四国の主な型式	北部九州との対応
Stage1	中期後葉	里木Ⅱ・Ⅲ(新)	春日(新)
Stage2	中期末葉	大柿類型・北白川C(新)	大平・並木～阿高
Stage3	後期初頭(古)	中津Ⅰ(最古)～(新)	中津Ⅰ併・坂の下(古)
Stage4	後期初頭(新)	中津Ⅱ	中津Ⅱ併・坂の下(新)
Stage5	後期前葉(1)	福田K2(古)	福田K2(古)併
Stage6	後期前葉(2)	福田K2(中)	福田K2(中)併
Stage7	後期前葉(3)	福田K2(新)	福田K2(新)併
Stage8	後期前葉(4)	松ノ木(古)～(新)併	橋詰(古)～(新)
Stage9	後期前葉(5)	津雲A1～2	津雲A1～2併・土佐井
Stage10	後期前葉(6)	津雲A3～4 ・彦崎K1成立～(古)	小池原上層・津雲A3～4併
Stage11	後期前葉(7)	彦崎K1(中)～(新)	鐘崎Ⅱ
Stage12	後期中葉(古)	彦崎K1崩壊期 津島岡大25a層～四元	鐘崎Ⅲ 北久根山
Stage13	後期中葉(中)	彦崎K2(古)	太郎追(古)
Stage14	後期中葉(新)	彦崎K2(新)	太郎追(新)
Stage15	後期後葉(古)	元住吉山Ⅱ併	三万田
Stage16	後期後葉(中)	宮滝1併	鳥井原併
Stage17	後期後葉(新)	宮滝2併	御領併
Stage18	後期末葉(古)	滋賀里Ⅰ併	広田(古)・天城併
Stage19	後期末葉(新) ～晩期初頭	滋賀里Ⅱ併	広田(新)・古閑Ⅰ併
Stage20	晩期前葉	秋篠併	古閑Ⅱ併
Stage21	晩期後半(古)	篠原(古)併	黒川(古)併
Stage22	晩期後半(中)	篠原(中)併	黒川(中)併
Stage23	晩期後半(新)	谷尻併・篠原(新)併	黒川(新)併
Stage24	晩期後葉 (突帯文出現期)	前池併・鬼塚併	突帯文出現期
Stage25	晩期後葉 (弥生早期)	(津島岡大23次河道2)併	曲り田・山ノ寺併
Stage26	晩期後葉 (弥生早期)	津島岡大併・船橋併	夜臼Ⅱa(古)
Stage27	晩期後葉 (弥生早期)	(百間川)沢田併・宮ノ下併	夜臼Ⅱa(新)

第3図 時期設定



第4図 東南四国域における  
文様系統組成比の変遷1 (Stage2～14)

の転換を試みた活動である。ただ残念なことに、以後も無文系をはじめとした在地色の強い粗製土器群等や製作技法に対する評価は、筆者以外行われることなく、今日に至っているのが実状といえよう。それどころか、未だ充分な通史の地域編年すら確立されていないのが現状なのである。

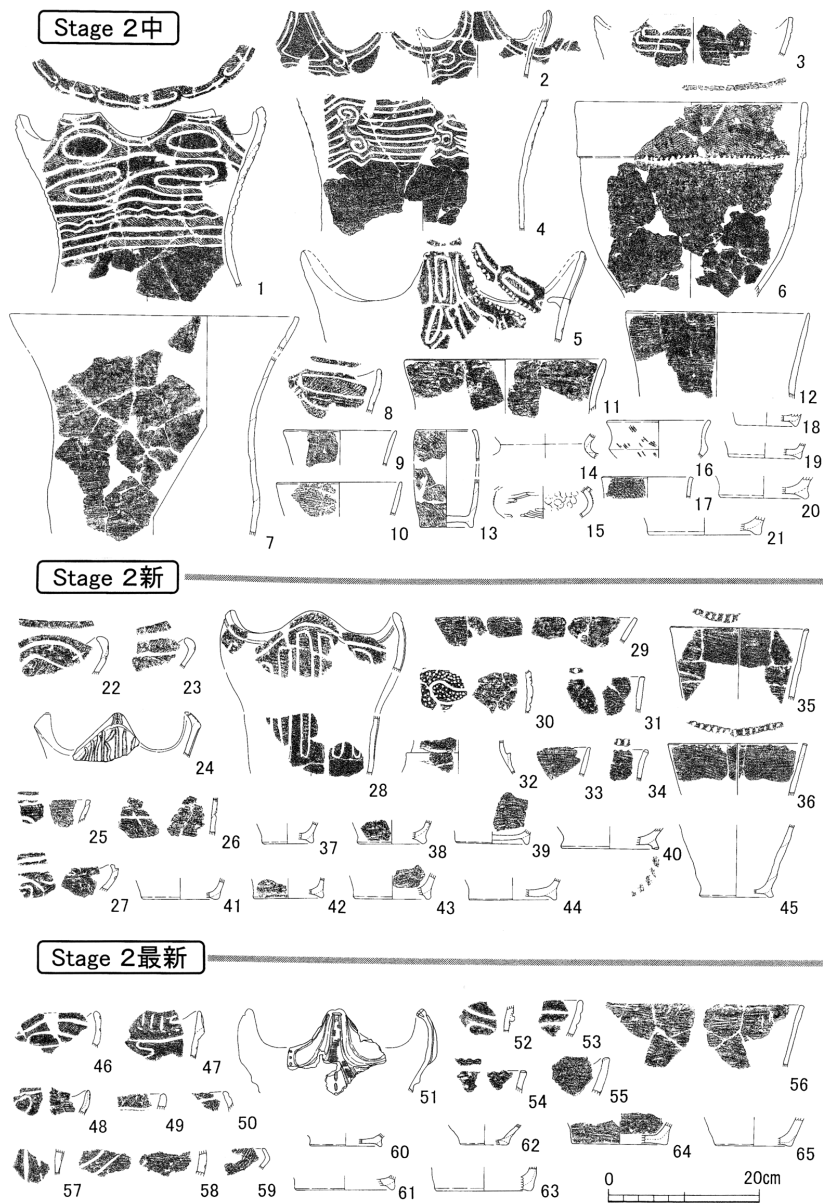
以下では、2017年発表の日本海シリーズ第一弾における分類基準を踏襲しつつ、東南四国編については、併せて有文精製深鉢を指標とした縄文後晩期の基本的な地域編年を構築する<sup>3)</sup>。また同時に文様系統組成の変遷を整理し(第4図)<sup>4)</sup>、未評価の無文系土器群に関する独自性についても明らかにしたい。

### 3. 東南四国域の検証(前篇) — Stage 1～14—

#### (1) 吉野川上流域における Stage 2 の様相

まずは吉野川上流域に位置する東みよし町大柿遺跡(光下新町線地区)の第13遺構面遺構群～第13包含層から、考察をはじめよう。

前節でも述べた通り、当該遺跡では、四国地方としては稀有な Stage 2 段階の良好な一括資料が得られている(幸泉・棚次編2005: 第5図)。すなわち最下部の第13遺構面遺構群が Stage 2 中相、第13遺構面直上が Stage 2 新相、さらにそれらを覆う第13包含層が Stage 2 最新相と想定でき、一調査区内で連続した3小期を導出できるのである。しかも、同地区の第13包含層より上部層では、後期初頭の中津式～後期前葉の福田 K 2 式段階までの資料が一切出土していない。直上の第12遺構面においてはじめて Stage 8 段階の資料群が少数登場する程度である。すなわち大柿遺跡周辺では、吉野川上流域特有の比較的狭い河岸段丘域内での時期毎の集落(地点)移動が認められるのである。既に筆者が触れる通り、短期の集団や小地域社会の動向を論ずるうえで



第5図 吉野川上流域における Stage 2中～最新段階の様相

(東みよし町大柿遺跡光下新町線地区：1～21第13遺構面遺構群、22～45第13遺構面直上、46～65第13包含層出土)



学術的価値が高いエリアといえるだろう（幸泉2009d）。

文様系統は里木Ⅱ・Ⅲ系、プロト磨消縄文系各種（北白川C類型、矢部奥田類型、大柿類型等）、沈線文系、刻目素文系、素文系全縄文類型、そして無文系統から成り、実に多様である。別途触れてきた通り、うち有文精製の深鉢では在地の里木Ⅱ・Ⅲ系統の文様構成原理を継承した大柿類型が、さらに、それらから縄文を廃して粗製化した沈線文系波状文類型（幸泉2001）等が主勢を占めている。

以下第5図に基づき、各小期ごとの地域編年を再構築しつつ、吉野川上流域（Ⅶd圏）における無文系出現期の様相を検証してみよう。

第5図上段は、最古相にあたる第13遺構面遺構群出土の土器である。有文精製のプロト磨消縄文系統のうち、1～4に示す横位連繫の大柿類型が目立ってくる。同系統は里木Ⅱ・Ⅲ系統の横位展開による波状文や連弧文、横走沈線といった伝統的文様属性の継承に加え、新たに東方より磨消縄文手法を導入することで成立した新類型である。隣接する中東部瀬戸内～関西圏で磨消縄文が成立、定着するのが中期末の中段階以降であるから、これら一群を Stage 2 中相と捉えたい。こうした年代観は、共伴する関西系の北白川C類型C型（第5図5・8）や、中部瀬戸内由来の矢部奥田類型（第5図6）とも概ね矛盾しないであろう。また新たに登場する壺形土器（第5図14・15）や、全縄文ないしは無文浅鉢（第5図16・17）、さらにはコップ形を呈する小型深鉢（第5図13）の存在は、該期前後に導入された外来の新出器種として捉えることができる。つまり、Stage 2 中相には周辺他地域との多様な交渉に基づいた器種構成の大変がⅦd圏でも達成されたのであり、その一環として、粗製深鉢についても明確な作り分けが開始されたと理解できよう。もっとも該期の粗製深鉢をみると、この段階ではまだ沈線文系統が殆ど窺えないことも判る。すなわち、有文精製たるプロト磨消縄文系の一群は東方起源、対する無文粗製の一群は西方より情報伝播し、壺や浅鉢等の新器種とともに新たな器種組成が誕生したばかりの該期ではまだ、両者の中間に位置する沈線文系統は、少なくとも吉野川上～下流域では積極的に製作されていなかったことを暗示するのである。このことは筆者の、沈線文系は九州の阿高系と連動した西部瀬戸内～西四国起源の文様系統とする従来からの見解にも符合した傾向といえるだろう（幸泉2001ほか）。

この頃の無文系統の、深鉢中に占める割合は40%である（第4図最上段）<sup>5)</sup>。ここではまだ、口唇を刻むK類型が原則認められない。7・9～12に示す無文系M類型の深鉢のみで構成されるからである。器形は、頸部が長い緩外反または緩外傾の屈曲Ⅰ-2-⑧～⑨形（幸泉2017p60）で、平縁のほかは、原則としてプロト磨消縄文系深鉢の器形に準じている。一方で器面調整では、既に巻貝条痕が圧倒的主勢を成している<sup>6)</sup>。この、巻貝条痕の出現経緯についても未だ充分な検証が行われていない。現

状では唯一、矢野健一が兵庫県丁・柳ヶ瀬遺跡を例に、Stage 2 段階に近畿地方西部（東瀬戸内）側からの影響で成立するとの指摘がある程度であろう（矢野1994p165）。深鉢・鉢底部については、外縁の張る高台底のみで構成される（第5図13・18～21）。

第5図中段は上記遺構群が検出された基盤層上面（遺構面直上）から出土した一群である。層位理論上、第13遺構群が廃棄、埋没した直後頃まで地表面上に散布していた土器群を含むことになり、若干新しい一群を含む可能性が想定できる。もとよりプロト磨消縄文系の22・23をみると、先の第5図1で典型であった口唇部に鱗状の逆L字状突起と区画意匠を施す個体が姿を消し、口唇上は、単純に縄文を施すのみにまで退化している。こうした型式変化は、大波頂口縁を成す第5図5→24でも同様に看取できよう。故に第13遺構面直上の一群が Stage 2 の新相段階に相当すると指摘できるはずである。文様意匠では、24・28のような東方の北白川 C 類型を起源とする縦位展開の構成が盛行しはじめる。また小片ばかりであるが、25～27に示す沈線文系や、30のような充填刺突の例も伴ってくるのが判る。

無文系統では、該期にのみ31・34～36で示されるような K 類型の存在が目立つ傾向にある。うち35・36は同一個体ではないが、特徴が酷似する。砲弾Ⅱ-⑦形（幸泉2017p60）の例で、40の刻目底部とともに、西方起源の可能性がもたれよう。しかし無文系の組成率は、こうした K 類型と M 類型を合算しても46%であり、前段との変化は殆ど認められない。つまり口唇刻目の有無は、あくまで同じ無文系統のなかでの変異と読み取れよう。深鉢・鉢底部は前段と同じく、外縁の張る高台底ばかりで構成される（第5図37～45）。

第5図下段は、さらに第13遺構面の直上を覆う包含層内資料である。特に遺構面に近い下部で纏まって出土している。層位学的にみてもう一段、新しい可能性を示す一群といえよう。46はプロト磨消縄文系大柿類型の小片である。先の22・23でみた口唇部文様帯が消失し、口縁部の、大柿典型的な横位連繋による磨消縄文意匠のみが継承されている。また51は、北白川 C 類型に属する大波頂口縁深鉢の新例である。一見すると、後期初頭の中津Ⅰ式古段階と見紛うばかりであろう。しかし、注意深く観察すれば、口縁部における滴状区画文の下端部域と、頸部から縦位に展開する紡錘文の接続域が食い違っていることに気付くはずである。すなわち、まだ一連の縄文帯構成が完成していないのである。これらはかつて鈴木徳雄が定義した三原則、「帯状部意匠抽出の原則」、「描線不交差の原則」、「交互施文の法則」（鈴木1993p22）を満たさないことになるから、後期初頭直前の段階と結論付けられよう。第13包含層の帰属時期は従って、Stage 2 最新段階となる。

無文系統の組成率は39%と、前段までの傾向を維持し続けている（第4図）。うち口唇を刻む砲弾形深鉢は如実に減退する。ただそうしたなかで、54に示す、口唇部を

巻貝押捺により施文するⅦ-①型(幸泉2017P65)の存在は注目されよう。何故なら中期末～後期前葉において、西方の周防灘沿岸周辺域で散見されるタイプだからである。54もまた西部瀬戸内を介した西方影響を示唆する個体といえるだろう。深鉢・鉢底部では高台底が主勢を維持するものの、それらの外縁隆帯が幾分萎縮化する傾向が、新たに窺える(第5図60・63・65ほか)。併せて、62・64のような東方起源の平底Ⅰ・Ⅱ類(幸泉2009dほか)の若干量の流入も確認できる。後期初頭成立に向け、依然、東西交流の活性化状態が維持されていると認識できよう。

## (2) 吉野川下流域以南(Ⅵc圏)における Stage 2 以前の様相

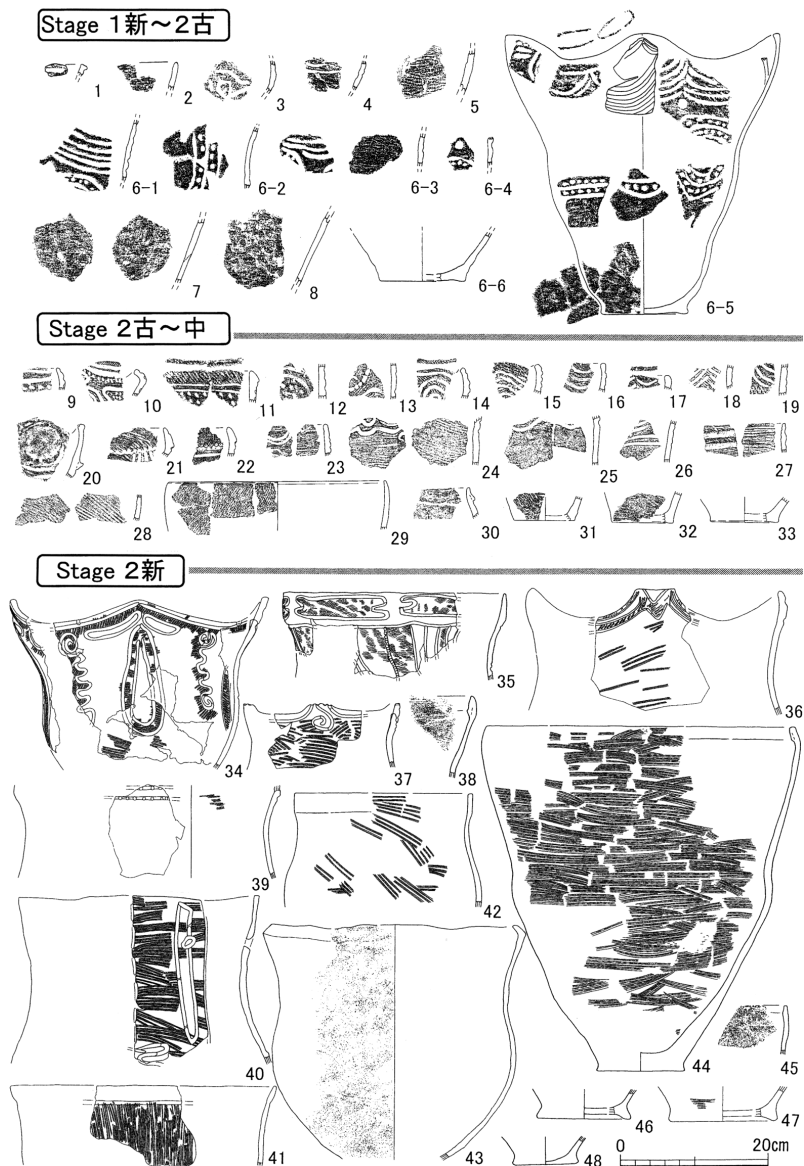
つづいて資料の最も充実する吉野川下流域、Ⅵc(平底)圏についてみていこう。まずは Stage 2 以前の状況である。

Stage 1 段階については遺跡数そのものが極めて少なく、実態不明の状況下にある。敢えて、現状で Stage 1 前後と推察できる事例を挙げるとすれば、石井町石井城ノ内遺跡 SD5001の資料群と、美波町田井遺跡包含層のうち型式学的に抽出される最新資料群の2例を指摘できる程度であろう。もっとも、一括性は疎か、一時期のセット関係すら把握することが難しい。

第6図上段は、石井町石井城ノ内遺跡の SD5001から出土した一群である。不明瞭であるが、浅鉢が伴っていないことから、未だ深鉢のみで構成される段階の可能性がある。うち6は、多条の太沈線と刺突充填を特徴とする未命名型式の一群である。岡山県矢部奥田遺跡(浅倉編1993)や里木貝塚(間壁・間壁編1971)、広島県地御前南町遺跡下層(河瀬1984)、山口県宮の原遺跡第2次調査区(濱崎編2003)等で断片的ながら類縁する土器片が出土していることから、概ね里木Ⅱ・Ⅲ式の新段階に近い、Stage 1 頃の様相と捉えることができる。この段階ではまだ、確実視できる無文系統は数%未満に過ぎない。もとより当該遺跡でも、図示できる個体は存在していない。底部では、外縁のやや張る平底(第6図6-5～6-6)が出土している。

つづく第6図中段は徳島県南部に位置する美波町田井遺跡の事例である。2002年の緊急調査で縄文中期前半の土器片が大量に出土した包含層資料のうち、明らかに時期差として抽出可能な同地区最新時期の一群を掲げた。型式学的にみて、Stage 2 の古～中相段階に相当しよう。先の横位基調による多重の太沈線と連続充填刺突を特徴とする一群は、第6図9～13等として継承されている。しかしこの段階になると、新たに単節縄文の押捺技法が加わってくる。口唇部に縄文を押捺する手法は該期以降の特徴といえるだろう。なお20～23のように口縁部文様帯に施文を集約させ、文様帯下端部に刺突列を設ける例は、プロト磨消縄文系の矢部奥田類型に分類可能である。30は無文であるが、折返し口縁の特徴から同類型、ないしは里木Ⅱ・Ⅲ系統新段階の影響





第6図 吉野川下流域における Stage1 新〜2 新の様相

(1〜8 石井町石井城ノ内 SD5001、9〜33 美波町田井遺跡包含層最新相、34〜48 徳島市矢野遺跡；  
34・39・41 第3区5層、35・36・40・43・44・47 第3区 SX6001、37 第3区 SB6006、38・46・48  
第3区 SX6004、42・45 第3区 SB6003出土)

によるものと判断してよい。これらに、Stage 2 中相では沈線文のみの14~19、24~27のような系統が伴ってくるのである。うち27は幅10mmほどもある太凹線を薄手の口縁部に描く稀少例で、太平洋岸を介した西方影響が想定できる事例である（幸泉2018b）。内面には二枚貝条痕を明瞭に残している。このほか伴出の素文粗製深鉢として29の全縄文深鉢を挙げておきたい。当該遺跡の場合、中期中葉以前が主体を占めるため、全縄文深鉢もまた、全てが船元式に伴うと見做されがちであろう。しかしながら、同個体は縄文原体が条幅約2.5mmと細く、節も繊細であって、施文が斜位に流れるなど、特徴が明らかに異なる。上記 Stage 2 の精製有文土器にも通ずる施文手法といえよう。内文もなく、器形は単純な砲弾Ⅱ-③形、ないしはⅡ-⑫形（幸泉2017p60）を成す。同種の全縄文深鉢は、北陸西部では Stage 2 の串田新式や大杉谷式前後の段階に定量が伴っており、関西地方南部でも、神戸市篠原 A 遺跡（定森編1984）等で流入が確認されている。紀伊水道を介した東南四国域では今のところ未知の存在といえようが、プロト磨消縄文系の成立に伴い、こうした素文粗製土器がセットで伝播した可能性は否定できないであろう（幸泉2009a）。

第6図下段は徳島市矢野遺跡出土の最古相の一群である。概ね Stage 2 の新~最新相に位置する。先述の通り、純粋な一括事例は存在せず、遺跡最下部の遺構内覆土や包含層中に散在して出土している。層位学的にも、当該調査エリア内で最古相と認識してよい一群といえよう<sup>7)</sup>。有文精製深鉢では口唇部への施文がほぼ払拭され、無文化するとともに、磨消縄文が完成しつつある。口縁部と頸胴部文様帯が未だ明確に分離される点で、中期と断定できよう（第6図35~37等）。うち34のように、一部に一体化の兆しが窺えることから、終末期に近い段階の一群と捉えるべきである。なお39は日本海側の丹後~嶺南、因幡地域を中心に分布する平類型に属する稀少種で、矢野遺跡では最下部層を中心に僅かに数点のみが検出されている（組成比0.1%未満；幸泉2008b）。このほか41の存在も注目される。無文帯を成す低平な口縁部肥厚帯下端に沈線一条を設け、以下に、明瞭な櫛描条線を縦位展開で埋め尽くす粗製深鉢の一種である。こちら西日本の東縁、北陸西部から中部東海側で散見される稀少な事例であって、組成率は0.1%未満、数個体が確認されるのみである。先の田井遺跡における全縄文深鉢と同様、これらは、一時的ながらも日本海側との間接ないしは直接的な交流が存在したことを示唆する事例といえよう。以上の認識と追跡もまた、多様な文様系統から構成される該期 Stage 2 後半の様相を解明するうえで、本来重要な作業のはずである。

共伴する無文系深鉢としては38・42~45が挙げられる。深鉢中に占める組成率は4割強で、先述の大柿遺跡の分析結果とほぼ共通している（第4図）。器形は、Ⅰ-1-②~④、Ⅰ-2-②・③・⑥形（幸泉2017p60）と多様であるが、平縁の屈曲深鉢

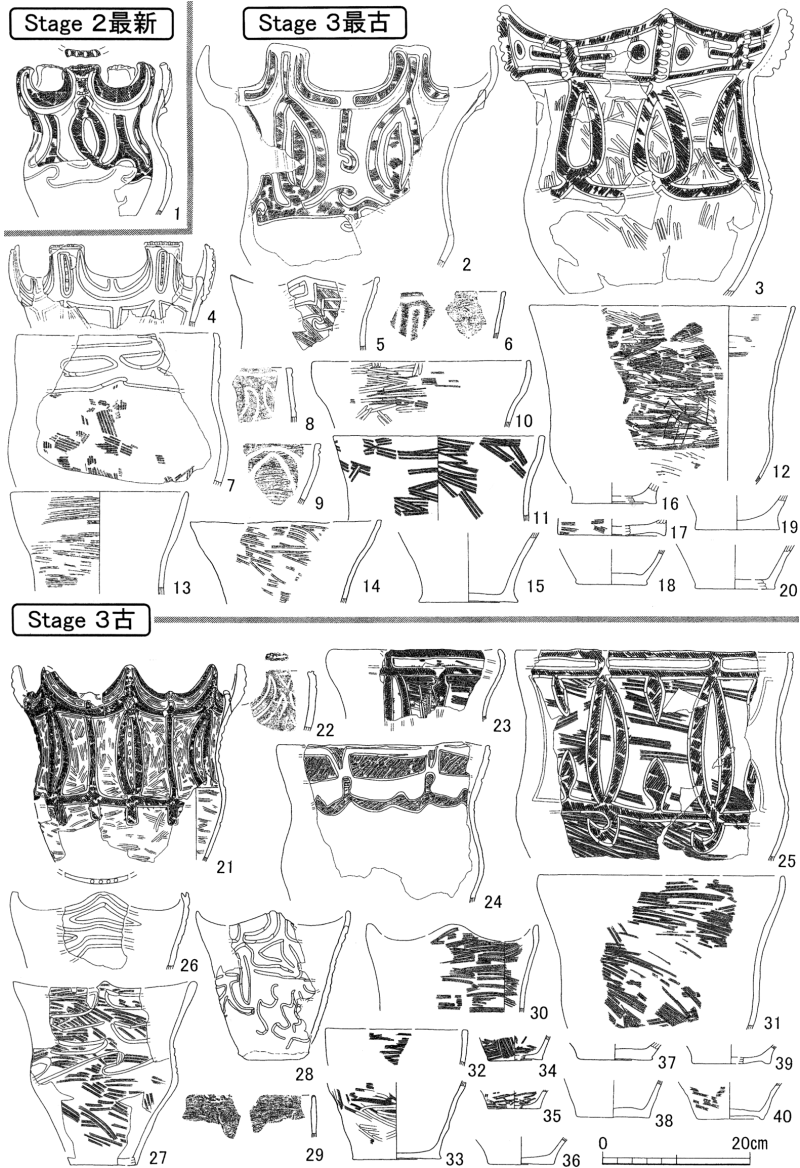
である点では共通する。すなわち口縁部を屈曲、帯状肥厚により強調する手法は有文精製深鉢に準じた該期の特徴であり、精神面における有文、無文間の一部未分化状態を垣間見れよう。うち内面肥厚Ⅸ-③a形（幸泉2017p61）を示す個体は、今のところ Stage 2 新相のみに認められる傾向にあり、有文深鉢とは異なる傾向を示す。その出自の究明もまた、今後の課題となろう。このほか、45は砲弾形の可能性がもたれる稀少個体として注目される。同じく口縁部内面端部に帯状の微隆帯が確認できる点で、上記諸群との同時期性が担保できる。ここでは砲弾形の出自と伝播経路が課題となろうが、筆者は日本海側に故地があると想定している。上述した平類型の極少量の伝播時期とも時期が重なることを鑑みれば、ここでも、東瀬戸内を介した丹後～山陰東部圏との交渉が想起されよう。

最後に、無文系全般の器面調整についてである。前段の二枚貝条痕から一転して、該期では巻貝条痕が圧倒的となる。こちらも東・中部瀬戸内側との交渉関係を想定することで、一応の説明は可能といえよう。深鉢底部は平底主体を崩さない。ただ同時に、第6図46・47のように外縁の少し張る高台底も少量流入してくる（SX6004で組成率3割弱）。先の大柿遺跡光下新町線地区における第13遺構面直上土器の技法と類似するものである。つまりは東方ばかりではなく、吉野川を介した西方との交渉もまた、非視覚的な製作技法や無文系レベルでは確実に存続していたことを明示するものといえよう（幸泉2009d・2018b ほか）。

### (3) 後期初頭～後期前葉 1 ; Stage 3～6の様相

後期初頭を迎える Stage 3 以降も、徳島市矢野遺跡では、必ずしも良好な一括資料群の抽出を果たせてはいない。けれども、大規模調査から Stage 2～9までの様相をほぼ連続的に追跡できている点、加えて Stage 3～4段階の充実した土器内容は、環瀬戸内海沿岸圏全体を展望しても未だ群を抜く存在と高く評価できる。

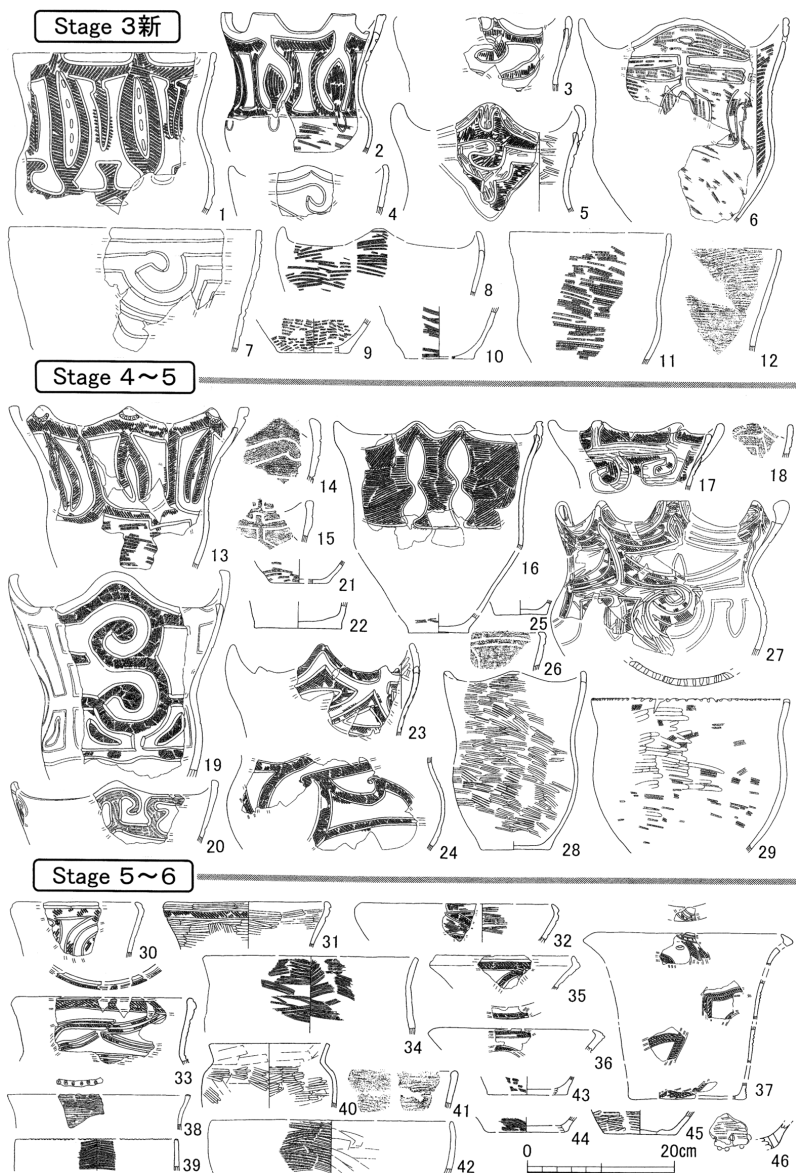
ここで再び、第4図の組成比グラフを比較しておこう。無文系深鉢は Stage 3 最古相の中津Ⅰ式古段階に相当する3区SB6006、2区第6層で、何れも約4割の比率を示唆している。うち、口唇部を刻む無文系K類型は4%と極少であった。SB6006でV-③斜刻C(L)型（幸泉2017p65）を示す深鉢小片が、僅かに1点検出されているに過ぎない。北部九州沿岸域では、同タイプの砲弾形深鉢が粗製土器無文化の基盤として重要な役割を果たしており（幸泉2001・2017ほか）、吉野川上流域に位置する先述の大柿遺跡でも、Stage 2の新段階ではそうした影響が看取できた。しかしながら四国の東端に位置する吉野川下流域では、K類型は極めて客体的なまま推移しているのである。以後、Stage 3古段階までを含む3区SB6003や3区第6遺構面直上、3区第5層、4区第4層等でも、無文系の割合は総じて4割前後のままである（第4



第7図 吉野川下流域における Stage3 の様相

(徳島市矢野遺跡：1・6・8・13・16・18～20第3区 SB6006、2～5・7・9・14第3区 SB6003、10・12・15・17第3区5層、21～23・26・30～41第4区 SR4003、24・27・28第3区3層、25第3区 SH6016出土)





第8図 吉野川下流域における Stage4～6の様相

(徳島市矢野遺跡；1第3区6面直上、2・3・6・7・9～12第3区3層、4・5・8第2区SR4003、13～18・21・23・25～29第3区2層、19・20・22・24第2区3層、30～46第2区2層出土)



図)。層位的にみてより上位に位置する4区SR4003や2区第3層、3区第3層、3区第2層(Stage 3～4)、さらにStage 4～5を主体とする2区第2層においても、無文系の組成比は約4割を維持し続けている。以上から、少なくとも吉野川下流域においては、西方諸圏にみられる無文系の増加現象は窺われず、Stage 2の新段階で玉突きの生じた無文約4割という組成比を、以後も継承し続けたと判断できよう。

第7図では、後期初頭Stage 3段階における最古～古相までの具体事例を図示した。図の上段は3区SB6006、SB6003ならびに3区第5層から出土した、主に後期初頭最古相に属する一群である。有文精製の磨消縄文系1～3は、何れも口縁部と頸胴部を段成形により明確に区分し、その意匠は、原則として全て磨消縄文で統一されている。そうしたなかで1は唯一、波頂部に縄文地沈線の古い要素を残す点と、頸胴部の垂下文や紡錘文が完全に口縁部と遊離している点で、明らかに2・3よりも古相である。型式学的には、先の大栴遺跡光下新町線地区第13包含層と併行するStage 2最新段階への帰属が想定できよう。つぎに第7図2・3をみてみたい。ここでは、上記の波頂部下における中期末の要素が完全に払拭され、磨消縄文としての統一が果たされている。すなわちポジ＝ネガ手法を重ねることで、鈴木徳雄の三原則全てを満たした、いわゆる中津式が完成した段階と捉えられるのである。具体的には、1→2・3の連続した型式変化が指摘できる。これらをStage 3最古相に位置付けたい。なかでも3は、同最古相を象徴する好事例といえよう。磨消縄文は口縁部下端の明瞭な段を境としつつも、頸胴部意匠を完全に連結させており、強い、一体化に向けた志向を窺わせる。しかし、口縁部文様帯下端に設けられた同段の下半部裏側(非視覚的部位)には縄文が施されていない。このことは、口縁部と頸胴部文様帯の古い区分意識が遺存し、段成形をまだ排除できなかった段階と捉えられるのである。

伴出する沈線文系としては、第7図4～9が挙げられる。何れも磨消縄文系に準じた二条の带状意匠を前提とする施文展開に、特徴が見出せよう。そこでは、西部瀬戸内側のような一条単位の奔放な施文意識は見当たらない(幸泉2001・2008aほか)。組成率もまた、2割前後と相対的に低率を維持している。

無文系の組成率は依然4割強である(第4図)。もっとも、前段で普遍的であった口縁部の段ないし屈曲、肥厚に基づく強調的区分手法は該期で一気に弛緩化する。この流れもまた、頸胴部を一体化させようとする一貫した志向性のうちで説明が付こう。第7図10・11は弯曲した口縁部の下端に弱い屈曲を残す点で、そうした脱却に向けた過程をよく示唆する一群といえる。中津Ⅰ式古段階特有の強い内弯口縁の生成に向けた最古相の段階として評価できるだろう<sup>8)</sup>。もとより、左記の型式学的視点に基づくならば、口縁部の内弯屈曲がより弛緩化した13・14はより新相と捉えるべきである。これらが、次に述べるStage 3古相にまで下るか否かは今後の課題といえよう。

深鉢底部では、外縁の端反りが幾分強調された平底Ⅰ類（幸泉2009d ほか）が圧倒的主勢を成す。端反りの強調は、四国東南部内で共通した Stage 2～3 最古相の特徴といえるだろう。該期、小地域的にみれば平底、高台底等といった非視覚レベルでの違いが窺えるのだが、一方で、何れも外観レベルでは端反底としての視覚意識を共有していたことを看過できない。そうした視覚情報レベルでのネットワークは、広く、北部九州沿岸域にまで連絡していくからである。

第7図下段は、Stage 3 の最古相に後続する一群である。層位的には、先の遺構群 6000番台と包含層第6～5層よりも上位にあたる4区 SR4003、3区第3層等出土例が相当する。ここで出土する有文精製深鉢もまた、口縁部と頸胴部意匠が明確に区分される点で前段を継承しているが、口縁部下端の段が失われることにより、磨消縄文で結ばれる口・頸・胴部間の連携が一層進行し、意匠の単純化と一体化が鮮明化する。いわゆる中津Ⅰ式古段階のうち、前段の最古相を除いた後期初頭の第2段階、Stage 3 古段階に相当しよう。うち23～25のように平縁を成す例が増加するのも、該期以降の新たな特徴といえるだろう。

第7図26～28に示した伴出の沈線文系を観察してみよう。すると、それら口縁部のほぼ全てに窓枠状区画文が粗雑ながら描かれている点、さらには頸胴部との一体化傾向に気付くだろう。つまりは、磨消縄文系の意匠を簡略化させた一群（第3類；幸泉2001・2008a ほか）と捉えることができるのである。無文系では、30・31より前時期の段成形がほぼ完全に払拭されている。結果、端部を内傾させた強く、短い内弯口縁へと収斂されていくのである。深鉢中に占める組成率は SR4003、3区第3層ともに47%である。伴出の砲弾形深鉢としては29・32が挙げられるが、あくまで客体的といえよう。器面調整では横位の巻貝条痕が全盛で、二枚貝条痕はほぼ完全に消滅する。加えて、該期頃までは条痕後にナデを加える手法は稀である。あくまで、視覚的な地文の一種として条痕を明瞭に残す個体が多い。すなわち、Stage 2 以来の地文意識が、この Stage 3 古相の段階までは明確に継承されているとみるべきであろう。深鉢・鉢底部では、外縁端部を極めて弱く端反らせる平底が圧倒的主勢を占めるようになり、西方からの影響を示唆する高台底はすっかり鳴りを潜める。僅かに、39・40の外縁隆帯が低平化した例が散見できる程度である。おそらくは、緩衝地帯たる吉野川中流域（Ⅵ d 圏；第2図）を介して形態化した高台底のみが流入、ないしは製作され続けたのであろう。このことは、Stage 2 以来の小地域圏の安定的継続を示唆すると捉えられる。

つづく第8図では、Stage 3 新相～Stage 6 までの事例を抽出した。図上段は、矢野遺跡の Stage 3 古段階でみた SR4003および3区第3層出土のうち、型式学的にみて新相とみられる一群を中心に図示したものである。かつての玉田芳英の指摘に沿い、該

期になると有文精製深鉢では口縁部文様帯における窓枠状区画文の上縁がほぼ一斉に消失する（第8図1～5；玉田1989）。つまりは、口縁部～胴部までの文様の一体化が一層促進した段階と評価できよう。そして口縁部区画文の両小口を成した縦位凸字状の帯状文のみが遺存するようになる（1・3・5）。共伴する沈線文系も、同様に口縁部文様帯の稀薄化が鮮明化する（第8図4・7）。口縁部の内弯度が弱まり、頸部が緩やかに外傾屈曲する例が主勢化する（第8図8・11・12）。また、該期からは最終器面調整をナデ、ないしは粗い磨き調整で仕上げる例が増加傾向を示す。巻貝条痕を施す場合も地文として残すのではなく、むしろ、撫で消そうとする志向が窺われはじめるのである（第8図8・10・11等）。深鉢・鉢底部では平底が圧倒的主勢を維持するとともに、外縁の端反りが簡略化されはじめる（第8図10→9）。

第8図中段では、層位的にみて中～上位に位置する3区第2層、および2区第3層出土の一群を抽出した。Stage 4～5に相当する。有文精製深鉢では口縁部文様帯の退化が著しい。すなわち、前段で指摘された凸字状文の突端が失われ、横位一条の無文帯、ないしは縄文帯のみにまで衰退する（第8図3→17→13・16・19）。また、口縁端部が波頂部を中心に一部肥厚化するのも、新しい傾向といえるだろう。20・23では、加えて帯状を成す二条縄文帯の横位連繫化傾向が窺われる。これは西方影響を示唆する（幸泉2004b）。さらに27では縄文帯内に一～二条の沈線充填が、24では沈線間の交叉や遊離、入組化といった新手法も看取されよう。これらの動態は、学史的にもStage 5、福田 K 2 式古段階を告げる明確な型式変化といえるだろう。

伴出の無文系統は、2区第3層で組成率51%を占める。口頸部が比較的短く、胴部最大径位置が幾分上昇する。器形全体では口辺が直線的に緩く外傾し、やや胴部の張る I-2-③・⑥・⑦形（幸泉2017p60）が主体化してくる。口縁部の内弯成形は、このように痕跡化してくる（第8図28・29）。また、29のように口唇部に刻目を伴う例が再び増加傾向を示すようにもなる。器面調整では、巻貝条痕を明瞭に残す例がさらに減少し、代わって、最終器面調整としてナデやミガキ調整を加える例が増加する。以上の深鉢・鉢底部は平底を継承し続けるが、その外縁を端反らせる例は稀である。拡張化しはじめた胴部上半に向かい、底部外縁より直線的に成形する例が一般化するためである。

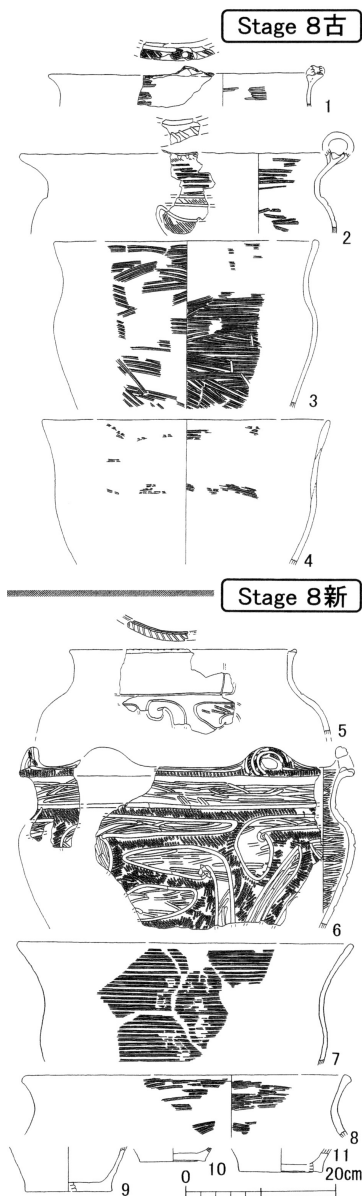
第8図下段は、上位の縄文包含層たる2区第2層出土の一群である。Stage 5～6を主体とする。有文精製の深鉢・鉢では口縁端部を若干肥厚、ないしは短く、逆「く」字形に展開させるようになる（第8図30～32）。文様は前段でみた二条沈線帯が幅狭化しつつ、沈線の一部を交叉、遊離させた例が一般化する。33・35～37は帯状意匠を三条沈線化させる福田 K 2 式中段階の一群である。学史通り、Stage 6 に位置付けられよう。

共伴の無文系深鉢の組成率は38%である(第4図)。内弯口縁が稀となり、単純外傾の屈曲Ⅰ-2-③形(幸泉2017p60)が主流となる。ただし、有文深鉢のように口唇部を肥厚化させた例は相対的に少ない(第8図41等)。口唇部を刻む無文系K類型は一定量が存続し(38・39)、Stage8へと連絡する。砲弾形としては39・42が挙げられるが、やはり客体的といえよう。器面調整では条痕調整を撫で消す個体が普遍化する。底部は前段と同様、端反りがなく、胴部に向けて強く外傾させる平底Ⅰ類(幸泉2009dほか)が圧倒的な主体を占める。

#### (4) 後期前葉2；Stage8の様相

緑帯文成立期については、矢野遺跡で良好な一括資料は窺えない。ただし層位的に上位の3区SB3004と4区第3遺構面直上、ならびに縄文包含層最上部に位置する第1層では、該期の資料が比較的纏まって出土しており参考にはなる。ここでも無文系は過半数を超えるものではなく、依然として4割前後の組成比を維持し続ける(第4図)。このStage8については矢野遺跡以外でも、吉野川市(旧鴨島町)の東禅寺遺跡で50%、吉野川中流域(VI d 圏)でも美馬市荒川遺跡SK1023で37%、同3区の遺物集中地点で45%と、概ね同等の組成率を維持し続けている。

第9図にはStage8段階に相当する矢野遺跡出土の具体事例を纏めた。図の上段は4区第3遺構面直上出土の資料群である。Stage8のうち古相に位置する。1・2は精製の有文深鉢。文様は肥大化した口唇部の上面と胴部上半に分帯され、頸部には無文帯が発達す



第9図 吉野川下流域における Stage8 の様相  
(徳島市矢野遺跡：1～4 第4区3面、5～11第3区SB3004出土)

る。四国地方周辺で広く松ノ木式と称されてきた一群である。うち、1のように口唇部ブラシ状文の地文として単節縄文を加える例は、南四国に多い。太平洋側を中心に分布する刻目素文系B1b型を祖型としていることは疑いないだろう（幸泉2012p76ほか）。伴出する無文系深鉢としては3・4が挙げられる。ともに口唇部を若干肥厚させた屈曲外反形であるが、後続段階と比較してまだ弯曲が弱く、先の有文深鉢との器形上の差異が際立っている。美馬市荒川遺跡等の事例から、既に、両者の中間を成す、口唇部が肥大化し、強い屈曲を示す個体や口唇部に明瞭な刻目を付すK類型も一定量伴うとみるべきであろう。Stage 8古相ではまだ前段の伝統を引き継いだ、こうしたメリハリの弱い粗製深鉢が相当数を占めたとみられるのである。器面調整では巻貝条痕を残す場合でも、最終的にナデを加える個体が圧倒的に多くなる。

第9図下段は矢野遺跡3区のSB3004内出土の一群である。Stage 8新相に相当する。5の有文深鉢を先の1・2と比較するならば、地文の縄文の消失、ブラシ状刻目文の萎縮化が著しいことに気付くだろう。こうした刻目意匠の退嬰化とともに、新たに口縁部では縄文地沈線文、ないしは広義の磨消縄文により、主文に重弧文、従文に横走沈線一～二条を施す個体が増えてくる。また該期では、主文中央の貫通孔が6のように未だ指掛け突起として機能している場合が多い。胴部意匠では5・6のように逆L字状区画文を磨消縄文の手法で描く個体を確認できており、松ノ木式の伝統が完全に崩壊していないことを認識できよう。

伴出の無文系深鉢の組成率は44%である。前段の延長上で把握できるが、相対的に口辺部の外反度合いが増し、頸部が若干長くなる傾向が窺われる（第9図7・8；I-1-⑦～⑧形；幸泉2017p60）。深鉢底部については、9～11のように平底を継承したままであるが、該期では、再び外縁を極めて弱く端反らせる個体が一般的となる。

##### (5) 後期前葉3；Stage 9～10

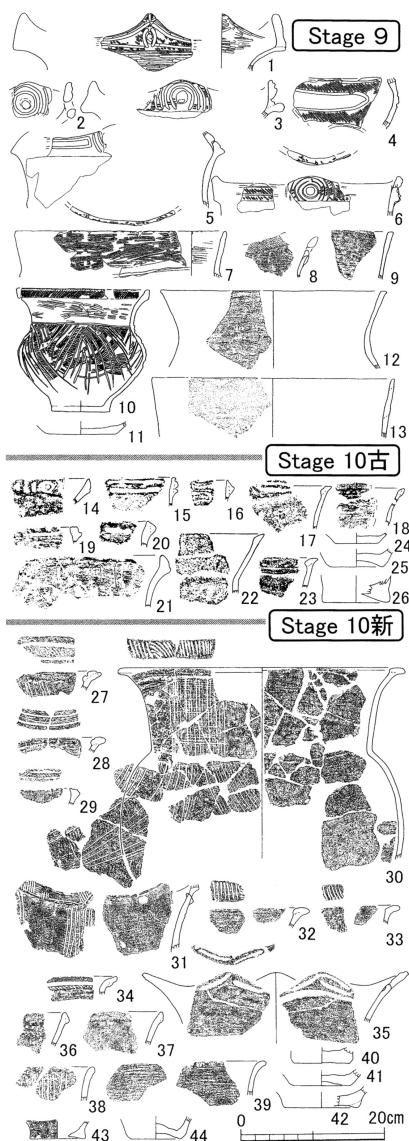
初期～前期縁帯文段階に議論を移そう。該期では、最古相のStage 9に帰属する徳島市矢野遺跡の5・6区包含層の例をはじめ、Stage 10前半を主体とする鳴門市松寺前谷川遺跡Ⅲ区土坑群（SK305を除く）、さらに吉野川中流域に位置する美馬市の荒川遺跡8区包含層と8区SX1007でも、Stage 10にはほぼ限定された資料群が出土している。また荒川遺跡の5-4・5-5区包含層では、前段との過渡期を示すStage 8～9段階の資料群も比較的多く検出されている。これらStage 9～10段階における無文系の割合は約4割と一貫しており、依然低調な組成率を維持し続けている<sup>9)</sup>。むしろ、該期では若干の減少傾向すら指摘できよう。その要因としては、口胴縄文系の成立が考えられる。

第10図にはStage 9～10までの事例を図示した。上段は矢野遺跡5・6区包含層出



土の一群である。Stage 9、かつて筆者が津雲 A 式最古相の A1 式を設定した際の指標の一つに掲げた一群である（幸泉2014b）。いわゆる有文精製の縁帯文深鉢では、先の Stage 8 新相で萌芽した外面施文型と、縄文地沈線文が主勢化している。口縁主文は痕跡化した凹点文（又は退嬰化した貫通孔）を中心に、対向連弧文や連弧文、従横走沈線と横長区画文へと画一化が進み、縄文地またはナデ地に明瞭に描かれるようになる（第9図6→第10図2・3・6）。また該期では、有文深鉢口縁部の成形法が上部へと継ぎ足す二段屈曲形を示す点でも古相といえるだろう（第10図1～3・5）。7・8は伴出の口胴縄文系である。先の筆者による分析によれば、四国地方では Stage 8 段階で口唇上に縄文を付す最古相タイプが登場する（幸泉2009b）。7は、そうした古いタイプを継承する土器といえよう。また8・10の口縁部外面に幅広の縄文帯を設ける例も該期、津雲 A1～2 式段階の特徴である。関西地方を中心に、多くの類例が認められる。

無文系深鉢の組成率は38%である。巻貝条痕を残す例はさらに減退し、ナデ調整で仕上げられる例が大半を占める。器形は、12のように Stage 8 新相でみた強い屈曲外反口縁 I-1-⑦～⑧形（幸泉2017p60）が継承される。13については頸胴部に緩屈曲を伴う可能性も残るが、該期の瀬戸内側では一時的に砲弾形を呈する深鉢が増加傾向を示すことから、本例もまた、その余波の享受を示す可能性



第10図 吉野川中～下流域における Stage 9 ～ 10の様相

（1～13矢野遺跡5・6区包含層、14～26鳴門市松寺前谷川遺跡Ⅲ区、27～34・36～44荒川遺跡8区包含層、35同9区包含層出土）

があろう。底部については個体数が限られるが、10・11に示される通り、Stage 9段階までは平底が主体的に継承されるとみておきたい。

第10図中段は、鳴門市松寺前谷川遺跡Ⅲ区の遺構群および包含層出土資料のうち、混在する Stage 2～4段階の土器群を除いた主要の一群である。Stage10の古段階に相当する。有文の縁帯文深鉢では、いわゆる膨隆口縁への成形手法の転換と、口縁部文様帯の萎縮化が顕著に窺える。また口頸部の外反化促進に伴って、口縁部内縁側に文様帯を設けた17・18のようなタイプ（内面施文Ⅶ型）が増加するのも、該期の特徴といえよう。鳴門海峡を介した淡路島側の南あわじ市谷町筋遺跡（川崎1990）等でも同様の傾向を把握できており、彦崎 K 1 式成立以前の津雲 A 3 式段階として認識できるだろう（幸泉2014b ほか）。

20～23は無文系深鉢である。組成率は4割弱を示す。何れも有文深鉢に準じて口縁部を内外に肥厚させる模倣形で、器面は、ナデによって仕上げられている。他地域の様相から、外反の強い素口縁の粗製深鉢も伴うとみるべきだが、当該遺跡では確実に抽出できる事例が存在しない。底部では、吉野川中～下流域で伝統的であった24のような平底に加えて、該期、新たに瀬戸内起源の小型凹底が流入してくる（第10図25・26）。Stage10段階で小型凹底が盛行するのは中部瀬戸内周辺域のみであり（幸泉2002ab ほか）、縁帯文の退化に伴い、概ね吉野川上流、ないしは香川県域を介した技術移入が開始されたと考えられよう。

第10図下段は美馬市荒川遺跡 8 区包含層出土資料を中心とするものである。近年、筆者が彦崎 K 1 式成立期の指標の一つとして掲げた一群である（幸泉2016a）。有文深鉢では、前段を継承する上面施文型の27～29が顕著に窺えるのだが、うち、28では縄文帯相当部の櫛描条線文への置換が、また29では、口縁部文様帯の一層の萎縮化が看取される。口縁部文様帯への櫛描条線の進出は、先に筆者が東南式の指標としたものであり（幸泉2016a）、Stage10新相に帰属すべき特徴といえよう。30～33は彦崎 K 1 式成立期段階の事例である。櫛描条線により、新たに口縁部に幾何学的な文様が施されはじめている。該期の外来系としては、34・35のような九州系土器が挙げられる。いわゆる小池原上層式からの系譜が辿れる稀有な精製の一群であるが、該期では浅鉢のみならず、まだ深鉢レベルでの受容が認められる点を特徴の一つとして指摘できる（幸泉2018b）。

36～39は粗製深鉢である。38の縦位櫛描素文は有文精製の頸部整形法と合致するものである（30・31等）。両者の同時期性を示唆するとともに、Stage10新相での櫛描条線文の盛行を窺知できる。無文系深鉢の組成率は31%である（第4図）。何れも口縁部を外反、ないしは外傾により仕上げる屈曲形が主流を成すが、うち36・37のように口縁部外面を幅狭に肥厚させるタイプは、前段 Stage10古相の伝統を継承するもので

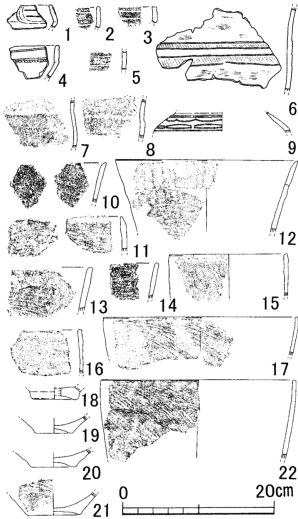
あろう。西部瀬戸内側とも通ずる傾向といえるが、粗製深鉢では、こうした古い特徴が一定期間継承されるとみてよい。40～44は深鉢・鉢底部である。前段で登場した底径7cm前後の小型～準小型凹底が、VI d 圏内に位置する荒川遺跡でも多く認められるようになる。在来の平底はすっかり客体化している。これらから、Stage10では従前の関西方面よりも、新たに中東部瀬戸内側との交流を重視しはじめたといえるだろう。もっとも無文系や口胴縄文系深鉢の割合が該期で急増するのではなく、あくまで、無文3～4割の低組成を維持し続ける点については、注意を要するところである。

#### (6) 後期中葉；Stage12～14の様相

この段階は良好な資料が極めて少ない。唯一、吉野川下流域（VI c 圏）に位置する阿波市（旧土成町）の西谷遺跡土坑群から、少数ながら Stage14段階の一括資料が検出されている程度である（久保脇編1995）。そこで Stage12～13については、参考までに紀伊水道を介した対岸の大阪湾周辺（VI a 圏）～紀伊半島西岸域（VI b 圏）の様相に触れることで、補完しておこう。

Stage11～12に相当する大阪府堺市小阪遺跡F地区遺物集中区（合田1992）では、VI c～VI d 圏と同じく、無文系深鉢は40%に過ぎない。このことは、兵庫県淡路島の淡路市東浦町佃遺跡縄文下層（深井編1998）で無文系が33%と類似した数値を示すことから、信憑性が高いといえよう。ところが Stage12以降、より東方における加曾利 B1 式や北白川上層式3期系統の隆盛段階に至り、様相が急変してくる。Stage12が主体の大阪府旧岬町淡輪遺跡1986西トレ西部流路内（藤永編1987）では無文系深鉢が60%と、一気に高比率を占めてくるからである。このことは、つづく Stage13、加曾利 B2 式併行期の一乗寺 K 式段階でも同様である。該期を主体とする和歌山県海南市且来 I 遺跡 SD1（前田・千葉1999）では、無文系深鉢が72%にまで達する。

近年、整理報告が成されたばかりの京都市一乗寺向畑町遺跡（Stage13）でも、無文系が深鉢中の50.4%と過半数に達することが、妹尾裕介により指摘されている。妹尾は、法量差の発生とともに「無文深鉢が地域の土器文化の中で基本的な器種として確立」してくると評価する（妹尾2014p69）。このことは、瀬戸内に面した大阪湾岸と連動しつつ、近畿の内陸部側では少し遅れて、無文系深鉢の増加が示現してくることを意味するものであろう。また西原和代・妹尾裕介による同遺跡の底部分析では、伝統的な平底が36%にまで減退するのに対し、新たに瀬戸内系の凹底が64%と主勢化するとの指摘が成されており（西原・妹尾2014p74）、上記予察を支持している。東南四国における Stage10～13の情勢変化は、以上の近畿地方側の動向とも軌を一にしているといえそうである。以上から、Stage12～14が瀬戸内を介した西方影響の拡大期に



第11図 吉野川下流域における  
Stage14の様相  
(阿波市西谷遺跡 SK1033・SK1034  
出土)

あたると捉えられよう。

前篇最後となる第11図では、そうした流れの延長上で理解可能な Stage14の古相、阿波市西谷遺跡 SK1033・SK1034の一括事例を掲げた。有文精製深鉢では元住吉山Ⅰ式古段階に比定し得る個体を複数判別できるが(第11図1～5・9等)、報告書でも記載される通り、それらの組成率は低い。また備讃瀬戸側のような口胴縄文系の出土も認められない。第11図7・8の例から全く存在しないとは思えないが、中部瀬戸内と比較して相対的に率が低くなることは確実であろう。その他の深鉢は、全て無文系である。その組成率は74%にまで達しており、縄文後期としては突出した数値を示している(第4図最下段)。凹線文ホライズン直前のこの時期、実は、西日本のほぼ全域で無文ないし素文深鉢が増大傾向を示すのだが、当該地域の場合も、瀬戸内ないしは山陰側からの影響を想定すべきであろう。このことは、砲弾形を呈する11・15～17・22のような、前段まで殆どみられなかった器種の多量出現のほか、12に示される北部九州起源の朝顔(Ⅱ-⑧・⑨)形深鉢(幸泉2017p60)の存在等が暗示するところである。底部は、径5～7cm程度の小型平底のみで占められる。ただし、同包含層資料では1点ながら山陰系の可能性もたれる小型低平高台底の出土が確認されており(報告書 p184No. 204)、別途、その出自も注目されるところであろう。

#### 4. おわりに

以上、本稿では仮称、太平洋岸ベルト地帯内に位置する東南四国域の無文系土器群のうち、都合その前篇として、Stage14以前の様相を検証してきた。現状で、Stage1段階の内容を明らかにし得ていないが、吉野川上流域に位置する大柿遺跡(光下新町線地区)の検証結果から、東南四国域で集落が激減した Stage1～2前半段階において、東方よりプロト磨消縄文系統の諸要素が、そして西方からは、無文粗製の新たな製作伝統や生活文化様式の一部が流入したとみるべきであろう。こうした結果、当該地域においては Stage2後半～3段階に向けて、新たな小地域社会が形成されていったと想定されるのである。

無文系統の組成比や底部製作伝統の在り様を検証することにより、吉野川上流域では、特に西方の瀬戸内海燧灘圏側からの影響が存することを今回、改めて看取できた。対して、吉野川中～下流域は関西平底圏（Ⅵ圏）に属していることが明白である。無文系統では、口唇を刻む無文系 K 類型を欠くなど、紀伊水道を介した近畿南部側との連動性も把握できている。組成比が4割前後の割合を後期中葉段階まで維持し続ける点もまた、近畿地方側に類縁した傾向といえよう（第4図）。すなわち、日本海側の対馬暖流ベルト地帯（幸泉2017ほか）とを比較するまでもなく、逆に本稿では、東南四国域における無文系の低調さを、詳細かつ客観的に示せたと考えたい。

後期中葉、加曽利 B 1 ～ B 3 式併行期にあたる Stage12～14段階の詳細は、依然不明瞭なままである。しかし阿波市西谷遺跡、および対岸の大阪湾周辺～紀伊半島西岸域側の状況からすると、該期に無文系統が5割から7割以上にまで増大してくることを一応評価できる。この時期、視覚レベルでの口胴縄文系の低調さが指摘される一方で、中部瀬戸内側からは小型凹底という新技法が流入し、山陰側からも東部瀬戸内を經由した小型低平高台底が介在してくる。つまり、近畿Ⅵ圏（幸泉2002a・2009d ほか）の西縁を成した東南四国域は、該期に瀬戸内、山陰側からの影響をより強く享受することで、以後、急速に無文系主体の器種構成へと転換していったのである。

こうした凹線文成立前夜をめぐる大潮流の余波を被ることで、東南四国域もまた、凹線文ホライズンを迎えることとなる。しかしながら、Stage14古相までに醸成された無文主体の器種組成が凹線文の成立以降、そのまま晩期へと継承されていくのか、といえ、実は様相はそれほど単純ではないことも判明している。

次稿では、そうした Stage15以降の様相について詳しく検証していくことにしよう。

（後篇につづく）



## 註釈

- 1) 以下、本シリーズにおける同表現には各地の博物館、資料館に加え、府県市町村における各教育委員会や埋蔵文化財センター等が管轄する文化財収蔵庫も含むものとする。
- 2) そのご諸処の都合から、発刊は約8年後の2010年12月にまで遅れている。
- 3) Stage 1～27の設定は恩師、川越哲志先生によるご指導の賜であるが、学界公表は爾来約20年を経た2017年発表の日本海シリーズ第一弾を嚆矢としている。これらの各 Stage は実年代上の等間隔を示唆するものではない。なかでも本シリーズでは特に Stage 3～7、すなわち中津式～福田 K 2 式段階の細別が際立っている。これは、別途連載中の日本海シリーズで中核を成す第二弾エリア内における該期の動勢を最重視したからに他ならない。
- 4) 個体数の算出は、深鉢・鉢の口縁部片に基づく。
- 5) 1998～2003年まで、当時徳島県埋蔵文化財センターの正規研究職員であった筆者が許可を得て、一部再実測や個体数識別計量調査を施した蓄積の成果である。以下同様。
- 6) この巻目条痕は Stage 2 段階の山陽～四国地方で突如として出現する。いうまでもないが、無文の粗製深鉢に採用される場合が圧倒的に多い。
- 7) 一部の見解では、出土層位等を重視するあまりに、これらが後期初頭の一群と同時期の可能性が暗に示されてきた（藤川・湯浅2003ほか）。かつて南久和が提起した“代謝現象”（南1985p26-27ほか）に近い思想とみられる。確かに一時的な併存の可能性はあろう。そして、そうした個別事例の反映（つまり出土層位を優先した素資料全ての提示）は、集落、遺構、集団間関係や外来問題を議論する際には有効となる側面もあろう。しかしながら、土器型式の序列やセット関係を議論しようとする場合は、廃棄年代の同時性に固執するのではなく、あくまで、製作年代の同時性究明を念頭に、型式学的操作による新旧の判別を施す作業こそが先決となるはずである。
- 8) 同時期の様相を示す最も纏まった事例として、現状で、京都府京丹後市（旧大宮町）裏陰遺跡 C 2 区包含層の資料群（杉原編1979）を挙げることができる。
- 9) このほか混在が指摘されるものの、Stage 9 主勢のつるぎ町貞光前田遺跡 I A 区 SB2001（泊編2001）でも無文系は31%と、依然少ない傾向を示している。

## 参考文献

次回後篇にて、一括掲載する予定である。

## 挿図表典拠（前篇）

第1図：幸泉2009d、第2～4図・第11図1・4・6：筆者原図、第5図：幸泉・棚次編2004、第6図1～8：岡山編2003、9～33：久保協編2007、34～48：藤川編2003、第7図～第10図1～13：藤川編2003、第10図14～26：森編1994、第10図27～44：大北編2005、第11図2・3・5・7～22：久保協編1995より一部再編。